

第2回 徳島木育サミットwith那賀

徳島で木育を語ろう 知ろう 体感しよう

2020.11.14 (土) 10:00~16:00 那賀町林業ビジネスセンター

主催 徳島県 共催 那賀町 協力 とくしま木づかい県民会議

午前の部 徳島木のおもちゃ美術館 (仮称) の開館に向けて

10:00~10:35 オープニングセレモニー

阿波人形浄瑠璃公演 ~木の文化×那賀町~ 出演 丹生谷清流座

2009年6月、那賀町内の青年団が中心となり、人形浄瑠璃座を結成。徳島に伝わる阿波人形浄瑠璃の郷土文化伝承と地域への貢献を目的に活動している。那賀町は人形浄瑠璃用の農村舞台が日本一残されている地域でもある。オープニングにふさわしい寿二人三番叟が披露された。

徳島木のおもちゃ美術館 (仮称) の紹介

会場だけではなく、Zoomを使って、オンラインで50名が参加した。全国からの参加者に対して、徳島県の観光紹介や、全国初の「県産材利用促進条例」等、これまでの森林、林業、木材に関する取組が紹介された。2019年2月に「第6回木育サミットin徳島」が開催され、木育への関心が高まっている。那賀町と三好市がウッドスタート宣言を行い、木づかい運動の高まりをみせているところである。木育サミットを一過性でなくレガシーとして継承するために、2019年秋に県版の第1回徳島木育サミットを実施。

2021年秋には、徳島県の木育中核拠点となる「徳島木のおもちゃ美術館 (仮称)」があすたむらんど徳島内に開館される。全国最大規模の県産材をふんだんに使った施設となる。しかも県営でおもちゃ美術館が開設されるのは全国初。イメージ図も公開され、老若男女が木に親しめる施設であることはもちろん、農村舞台をイメージした人形浄瑠璃の公演もできる空間があるなど、徳島県ならではの文化発信等もされる場所であることが公表された。より一層、徳島県での木のおもちゃ美術館への期待が高まる時間となった。

主催者挨拶 徳島県知事 飯泉 嘉門

那賀町は、最初にウッドスタート宣言をした木育発祥の地である。徳島県は阿波人形浄瑠璃や文楽の有名な人形を作る人形師を多く輩出してきた。木から作られる人形はまさに日本が誇る木工技術である。阿波人形浄瑠璃を2019年にパリのユネスコ本部で披露したところ大好評でヨーロッパ各地から招聘依頼があり、来年ルーマニアでの国家行事の中でも披露する予定。丹生谷清流座は第22回国民文化祭を機に誕生し、活躍をしてきた。徳島県では次世代の森づくりを見据えてのプロジェクトを先進的に進めてきた。子どもたちに木の良さを知っていただく木育広場が、20か所ある。徳島県版木育サミットも今回で2回目となり、さらに回数を重ねていきたい。



共催者挨拶 那賀町長 坂口 博文

木の本場の那賀町で木育サミットが開催されることは光栄。那賀町の95%は山地である。那賀町で山の良さ、木の大切さを理解し、体感していただきたい。

各パネリストからの報告後、全体討論が実施された。地域の特性とアイデアを生かした幅広い取組が紹介された。徳島県に新設される徳島木のおもちゃ美術館（仮称）への期待が一層高まった。

※登壇順に記載



【檜原村トイビレッジ構想：林業おもちゃの可能性】

(株)東京チェーンソーズ プロダクト販売事業部マネージャー 飯塚 潤子氏

東京大学農学部を卒業後、ITの仕事を経て東京チェーンソーズに入社。2014年夏に檜原村へ地域の木材、人材、休眠施設を活かした「おもちゃビレッジ構想」を提案し、同年に檜原村が「ウッドスタート宣言」を実施。2019年には「檜原村おもちゃ工房」オープン。2021年秋には「檜原森のおもちゃ美術館」がオープンする。おもちゃ美術館は単なる箱物ではない。今日観た阿波人形浄瑠璃のように地域資源の見直しや様々な付加価値を生む。檜原森のおもちゃ美術館は素材を活かし、空間を活用した取組であり成功事例にしたい。日本の森林、木材産業に関わる方の刺激になればと考えている。



【大食堂×おもちゃ美術館の想いと挑戦】

(株)小友木材店 代表 スターティアラボ (株)取締役 小友 康広氏

岩手県花巻でIT、木材、花巻駅前のリノベーションまちづくり、百貨店大食堂の再建等6社を経営している中で花巻おもちゃ美術館構想に辿り着いた。百貨店のマルカンビル大食堂の再開に関わり2017年3月に東京おもちゃ美術館の視察へ。見学前は補助金で運営をしているNPOだと思っていたが、施設が素晴らしいだけでなく自立して稼げる夢のある事業だと実感した。同年5月に沖縄のやんばるの森おもちゃ美術館に行き、感銘を受けマルカンビル内に設置することを決意。2020年夏に「花巻おもちゃ美術館」をグランドオープンさせた。将来的には大食堂との相乗効果をはじめ、豊かに子育てができるまち、地域に根ざした垂直統合型の新世代木材屋を目指したい。



【三好市における木育の取組～ウッドスタート宣言をして～】

三好市産業観光部 部長 松本俊明氏 ※徳島県三好市からオンラインで結び参加。写真は画面越しの様子

2019年2月の徳島県で開催された木育サミットで徳島県とともにウッドスタートを宣言した。木育キャラバンin三好を開催。誕生日にもらえるなら何がいいかを調査するアンケートを実施。かざら橋とラフティングをミックスした地域産材で作られた誕生日祝品が誕生した。また、森づくり基本計画推進体制を整えた。新型コロナウイルスの影響で木育キャラバン等の行事が中止になる中、代替案としておもちゃ箱貸出プラン、おもちゃ箱レクチャーを実施し、3つの保育所を巡回した。三好市は四国のへそ。徳島と香川とも均等な距離にある。徳島と香川のおもちゃ美術館にも近く、期待しているところが大きい。



【那賀町の木育】那賀町林業振興課 主事 横田 泰宏氏

丹生谷清流座にも所属し、オープニングでは人形遣いとして参加した。那賀町は豊かな森林資源や川もあり、林業で発展した。和紙の文化や農村舞台も残されている。令和元年度から那賀町と北島町連携協定に基づく木育ツアーも実施。管内小学校への木育教室への提供、ふるさと学習での木材市場への見学、木育に向けた農村舞台新規演出創出事業もしている。木育の認知度も上がり、子育て支援センターや学校から木育の要望も出てきた。那賀町木育拠点構想もある。町内観光コンテンツを強化し、地域住民が元気になれる場所、徳島県木のおもちゃ美術館（仮称）とも今後連携していきたい。



【暮らしの中の木育】林野庁木材利用課 課長 長野 麻子氏

2019年2月の木育サミットin徳島では、豊富な森を活かし木育を取り入れていくという共同宣言が行われた。セレモニーだけで終わってしまうところもある中、宣言だけでなく、並々ならぬ努力をし具体化されていることに感謝している。全国各地で地域の特性を活かしたおもちゃ美術館が作られている。徳島は全国初の県立でされるので、官民共同のいいモデルになることを期待している。人形浄瑠璃や農村舞台という木で作られた舞台は、地域の中に木の文化があり、文化を支える人たちのなりわいや、自然と共に暮らしてきたことの証明である。日本の木の文化は世界に誇れる技術である。木材利用促進法が施行され10年が過ぎた。日本の木を使用し、鉄筋コンクリートが材料であったものを木に変えていく。若い人たちにも木を使うことが浸透するように木をどんどん利用する「ウッドチェンジ」という言葉を広げたいので協力いただきたい。

全体討論



ファシリテーター
東京おもちゃ美術館
館長 多田 千尋氏

【全体討論のまとめ】

- ・四国では徳島県だけでなく香川県や、高知県内でもおもちゃ美術館が計画がされている。ひとつひとつが個性豊かで尖ったものができる。四国内で連携されていくことが望まれる。
- ・木育は儲からないという意識がある市町村もあるが、投資回収のツールとしても有効である。子どもたちが木を使って何かをやってみたいという場所は重要。那賀町はじめ徳島の山間部にはすでに全国一の農村舞台がある。子どもたちに経験してもらって体験を売るという考えも大いに有効ではないか。
- ・檜原村は東京であるが94%が森林。木を有効に使って山を持っている人も木を使う人もみんながハッピーになれる。木を切るところから始まり木を使い、買ってもらうという完全なワンストップが東京でできるのがすごい。檜原村を全国の成功事例にしたい。
- ・「ウッドチェンジ」は本日参加の林野庁の長野麻子氏が作ったキャッチコピー。まさに木づかい。森林が良いのは知っていて、木造住宅が良いという人も増えているが、国産材が使われていない。国産材の木の家の良さを若い世代の人たちに伝えてい。木を考えることを使うこと、ダジャレではなく、イメージを変えるための意気込みで「ウッドチェンジ」を進めたい。
- ・伸びしろがまだまだたくさんあることを感じた。四国の木育ツーリズムとしてやっていくんだという那賀町と三好市の子どもたちに対する木育の熱い思いやまなざしを感じた。限られた時間の中で多くの話題提供や熱い思いを共有できた。



13:30~13:50

基調講演

【木育×つな木】 (株) 日建設 アソシエイト アーキテクト 大庭 拓也氏

全国で初めて徳島県スマート林業課に本格設置された「つな木」の設計者。徳島県をはじめ63の自治体が無償提供した木材を建物全体に使用した東京オリパラの選手村ビレッジプラザ等を設計。

◆自己紹介

福岡県北九州市若松区出身で、農村の中で育った。都市計画の仕事を経験したこともあり、幼少期からものづくりに興味があり、建築を学んだ。箱物を作るということは環境を破壊するネガティブな一面もある。私は「作れば作るほど生命にとってよい建築」を自分の設計のテーマとし木材を利用したものを設計している。

◆つな木とは

小径の材木で簡単に組み立て・解体・移設できる木質ユニットである。角の無垢材と、クランプと呼ばれる接合部材、移動用の車輪という3つの要素で構成された基本ユニットを使い「どこでも誰でも」30分程度で簡単に組み立てることができる。今まで木を使ってモノ作りをしていない人でもDIY的に、大きいものから小さいものまでできる。作る段階で人とのつながりが実感でき、レゴのように簡単に組み換えもできるので自由自在に場所に適したものができる。地域社会産業への関わりもできる。大きな木造や小さな木造を面的に増やしていくことができる。

◆徳島県内に設置された「つな木」やその後について

徳島県庁と共同でオフィスへの木材導入を検討、実施する目的で2020年6月28日に設置され、県産材を使用し木質ワークプレイスの試行が開始された。新型コロナウイルスの影響もあり、当社メンバーは行かずに、徳島県スマート林業課のみなさんに、自分たちだけで組み立てて頂いた。「つな木」で阿波おどりの高張提灯、コロナ対策個人席、打合せ室などに作り変えることができた。10月に開催された「徳島木づかいフェア」でもワークショップで子どもから大人も一緒に木に触れてもらった。参加いただいたお子さんには「つな木ヤングマイスター」という賞状も作ってお渡しした。予定していなかったが、木づかいフェアの翌週、徳島市内でカフェイベントがあり、店舗としても利用し、トランスフォーメーションが実証された。

◆その他の実績

体操競技の国際大会で選手待機ブースとして「つな木」を導入。換気システムにより選手の感染予防もしていく。医療の現場では、発熱外来の仮設ブースやベンチとしてなど、日常使いもしていただいている。広大な自然の中にカフェやイベントスペースの利用として想定した「つな木ドーム」も挑戦をした。

◆今後について

「つな木」ワークプレイスは徳島からスタートし知事にもご理解いただいた。社内外の人と一緒に考えトライしてフィードバックしてすすんでいる中で私が木育をさせてもらっている。「つな木」を価値あるものに育てていきたい。みなさんも是非つな木を使っていただきたい。より一層、木材活用の活性化と日本の森林保全に貢献することを目指していく。

14:00~15:45 パネルディスカッション 県産材利用拡大を目指して建築に木育の輪を広げる ※登壇順に記載

【大人の木育】ウッドファースト (株) 代表取締役社長 桃溪 崇氏

人生の中で一番木材を使うのは住宅を建てる時。大人に対して木育も重要だと考える。当社は徳島県で唯一の機械等級区分の製材工場。会社の方針は、良い製品を作ってよい住宅(建築物に)使っていただきたいということ。構造材に求められる3つの性能が強度性能、寸法安定性能、耐久性能。エンドユーザーさんにしっかりした品質のものを使ってほしい。徳島県産材を中心に適切に管理された原木を製材している。新国立競技場のルーバーの材料を納品した。製材業は地域産業であり、地元の方にできるだけ使っていただきたい。地元の木材を使うことは私達の生活を守り豊かにすることになる。木材の課題は①木材の性能や情報が消費者に分かりにくいこと②森林認証材を含めて持続可能性の意識が低いことと考えている。

【これからの林業】亀井林業 (株) 代表 亀井 裕人氏

植林から伐採まで一貫した林業をしている。樹齢80年生以上の原木を伐採しているが、大径木が50年生よりも安い値段になる。何かできないかと山から木を切り出すことから木の家まで建てて売ろうと TSウッドハウス協同組合を作った。木材住宅の販売やスギの普及活動として春に植林、秋に伐採ツアーも実施している。ミツマタ、鹿牧場、ドローンと林業のコラボなども行っている。課題は4つ。①手間をかけた原木が適正価格で売れない。②これから増加していくであろう高齢樹をどう売っていくか。③一般の方に本当の木材が理解されていない。④ベストな乾燥方法が決めにくいこと。

【木をデザインするという事】環境デザインWORKS代表 清水 裕昌氏

木を使うことは住宅か店舗であるかでも基本的な考え方が違う。木をデザインすることを施工事例を通して説明。地域の特性や文化に根付いた設計をしている。スギの長伐期採林業により治山治水をし利益を還元するために葉枯らし天然乾燥の木材を使用し「土着木造住宅」を設計している。業界全体の課題は・設計者が県産材を利用することのメリットを説明しない。・無垢材の反りなどのクレームを避けてしまう。・内部空間において構造材を隠してしまうデザイン(大壁仕様が多い)。・天然乾燥材を使うには準備期間が必要。・建て主が合板や集成材も木と認識している。・教育課程で木について学ぶ機会が少ない。

【大工さんが丁寧に作る木の家】(株) 山田工務店代表取締役社長 山田 文夫氏

新人大工を正規雇用し育成及び定着する体制づくりや地域の木材を使用等幅広くSDGsの取組を行っている。レジリエンスシェルター(生き延びる部屋)を開発し販売している。無垢材と木育にこだわりを持ち、くむんだー(伝統工法の組み方の木のジャングルジム)の徳島県会員として積極的にイベントに参加している。新建材の普及とともに若い施主様にとっては新建材が家づくりの標準的な材料になってしまっている。課題は、・川上と川下の交流不足・無垢材の長所短所の知識武装・外材や集成材との違いやメリットデメリットを説明、・工務店、プレカット会社、行政の意識改革、・価格の問題等が挙げられる。

【建てようネット徳島】(株) あわわ建てようネット事業部マネージャー 山本 正代氏

タウン誌の「素敵な家を建てよう」というコーナー連載から始まった。施工会社でも木材会社でもない仲人的役割で「建て主」と「建築家」をつなぐ、ぴったりの建築家と出会えるマッチングサービスを2005年から行っている。エンドユーザーとじっくり関わっている。課題は県産材といわれても何を指すのかわからない人が意外と多い。「木の家に住みたい」という人は確かにいるが木の種類にこだわっていない。県産材はコストが高いと思っている人がほとんど。県産材の情報が建て主に届いていない。製材、加工、流通、建築家と建て主をつなぎ、得意分野を持ち寄って、正しい情報を伝えていくことが大事。

パネルディスカッション 県産材利用拡大を目指して建築に木育の輪を広げる 全体討論

ファシリテーター

東京おもちゃ美術館
副館長 馬場 清氏



県産材を建築の分野に広げていくためにはどうすればいいのか。県産材を使う価値や、その価値を伝える方法等について討論された。



・海外の建築を見るたびに感動しているが、帰ってくるとより一層地域の特性や文化に根付いた日本的な設計をしている。建築的にも地元で育った木を使うのは構造的にもあっている。ウッドマイルを考えても合理的。海外でも、風土が反映されたものを建築材料として使っている。日本の場合、風土にあっているのは木であると考え、純粋に材として使っている。木を使うことは、カッコいい。施主様には木のことを無農薬の白ごはんに例えて、飽きがこない住宅づくりをしましょうと、施工した場所を案内し空気も感じてもらいながら丁寧に説明している（清水氏）



・TSウッドハウス協同組合のメンバーは林業家。山に木があるから必然的に県産材を使う。スギの強度や精度の実験をこれまでしてきた。スギは全国にあるが、地域によって成長の仕方成分も違う。性能、香り、安眠効果、抗菌効果もあるというようなことを伝えたい。特に徳島のスギは強く粘り強い、カビにつよい。抗菌、防蟻効果もある。伐採ツアーは大人に対する木育の機会にもなっている。（亀井氏）

・徳島のスギは強度的にもしっかりしていて、色目もきれいである。徳島の強度の強い木材を使えばしっかりとした構造物が建てられ、安心安全な暮らしにつながる。エンドユーザーさんがどういう暮らし方をしていきたいのか、自分ごととして捉え伝えることが重要である（桃溪氏）

・私自身、県産材のスギが好きなので勤めている。伝統工法の組み方で作る木の「くむんだー」というジャングルジムを使ったイベントは今年は新型コロナウイルスの影響で開催できなかったが来年の春に開催する。木育だけでなく、会社のPRも行い、木に触れてもらう。当社のイメージアップにもつながる。（山田氏）

・スギのコンセプトブックのようなものを作りたい。今どき紙媒体と思われるかもしれないが、家を建てる方が資料として欲しがるのは紙が多い。今すぐ家を建てないエンドユーザーのさらに末端の方が見る本にも載せる、相談に来る施設になど、ありとあらゆるところにリーフレットを置いたほうがいい。川上から川下までの現場感ある知識、ノウハウを集結し分かりやすくカッコいいデザインで、県産材の魅力を編集発信したい。将来的に、とくしまの木を使った家をしっかり選択肢に入る環境を少しずつ作っていくことが必要である。（山本氏）

◆まとめ

・子ども向けのイメージのある木育だが、大人の木育が重要であるというパネラー全員の共通認識がある。徳島県におもちゃ美術館ができる。おもちゃ美術館に子どもが一人で来ることはない。子ども向けであっても大人の拠点であり、木の良さを伝えることができる木育の拠点でもある。

・経費などの問題はあがるが、住宅展示場のような場所に、川上から川下までどうやって木が使われているのか、木の家に住むと何がどういいのかなど、体験や体感できる場を作る。住宅展示場でもあり大人の木育の場ができるような拠点づくりも重要。

・教育現場で木について学ぶ機会が少ないという課題がでた。徳島県内でも少しずつ始まっているが、教育カリキュラムとして全県での取り組みも必要なのではないか。例えば、山にいて林業を学ぶことを、必修カリキュラムとして特定の学年で必ず全員に経験してもらえるようなことができれば、点でしていることを面で結ぶことができる。実現すれば、徳島県といえば山に行くと林業を学べる県として全国にも認知される。

・地道な情報発信も重要。単発の打上げ花火的なものではなく、木の良さを伝える場となる情報配信が必要。良いことばかりでなくデメリットも含めて情報開示をすることが必要。

・木の良さを伝えるツールをつくる。冊子、WEB、SNS、ゲームなどそれぞれの見せ方はあるが、どうして県産材を使うことが必要かということ伝えるストーリーをつくること。生産者や建築士などそれぞれの立場のみなさんががどんな思いで、どのような木や建築物を世に出しているのか、人の心を動かすストーリーを一緒に作り届けることも重要である。

・自分ごととしてやっていく。自分のくらしなど、身近なところから木の良さを伝える。興味をもってもらうところが必要。

みんなが県産材を使うのはまだまだ先の事かもしれないが、1つのことから地道に積み重ねていく。スギで家を建てるのは当たり前となるように、それぞれの活動で活かしていただければ。



15:45~16:00 クロージングセレモニー

とくしま木育共同宣言

徳島県南部総合県民局の岡本七海さんと那賀町林業振興課の福永啓太さんが「とくしま木育共同宣言」を読み上げた。2人は2017年11月に開催された「那賀町木育円卓会議」に那賀高校森林クリエイト科第一期生として参加していた。時を経て、今回は、県と町の林業振興担当として、木育の発信者としての登壇となった。円卓会議でアイデアとして提案していた木頭スギを使った「木の絵本」を地域の方々の協力で完成させた。「木の絵本」の原作は福永さん、イラストは岡本さんが担当した。木育サミット会場口ビーに展示され、絵本の内容も昼休みに上映されるなど、お披露目の場となった。心を込めて作った「木の絵本」にかけた思いなども話した。

学びを確実に形にし、未来へ進もうとしている2人が読み上げた「とくしま木育共同宣言」は、今後の「木育」の明るい兆しが感じられる時間となった。

